

〔新刊紹介〕

『増補 害虫の誕生 虫からみた日本史』

瀬戸口明久著 筑摩書房 2025

前藤 薫

野口雨情の童謡「黄金虫」の黄金むしは、コガネムシではなくチャバネゴキブリではないかと言われている。ゴキブリにしては落ち着いた曲調だが、子供に水飴をなめさせる様子はよく似合っている。一般家庭でも冬の室内が暖かくなってゴキブリが身近な〈害虫〉になったのは高度経済成長期以降のことであり、それまでは豊かさの象徴として大事にされることさえあったという。〈害虫〉は普遍的な存在ではなく、人間との関係のなかで歴史的に作りあげられてきたものなのだ。本書は、〈害虫〉の誕生を徹底した文献調査によって辿り、日本の近代化をより深く理解しようとする意欲的な挑戦である。

本文は、“近世日本における「虫」”、“明治日本と〈害虫〉”、“病氣—植民地統治と近代都市の形成”、“戦争—「敵」を科学で撃ち倒す”の4章からなる。

人々が「有害な虫」を「人間の力で排除されるべき〈害虫〉」と考えるようになったのは最近のことらしい。日本に水田稲作が広まって以来、農民たちは稲を食害する昆虫類「蝗」（イナゴだけではない）に悩まされていた。だが、「蝗」を排除する有効な手段がないなか、彼らは虫害を天災あるいは神罰だと考えて「虫送り」や「驅虫札」などの宗教的な方法によって堪え忍んできた。

ところが明治になって政府が〈稲作害虫〉の積極的な防除（排除）に乗り出すと、農民たちは激しく反発した。それは農民たちの旧来の自然観に反していただけでなく、「公益」という「国家にとっての利益」を目指したものであり、農民たちに厳しい労働を強いるものでもあった。そこで、新しい学問である応用昆虫学が、農民たちの「盲信」を断ち切り、彼らを近代的な〈害虫〉防除へといざなう役割をになうことになる。

明治以前の人々にとっても蚊やハエはうっとおしい存在であり、蚊帳をつったり火を焚いたりして虫を遠ざけたが、積極的に排除すべき〈害虫〉ではなかった。しかし、ハエがコレラなどの病原菌を媒介することが判明してしばらくすると近代都市では過剰ともいえる〈衛生害虫〉の排除が始まり、やがて農村にも広がった。それ以前に大日本帝国の両端にある北海道と台湾において深刻なマラリア被害が発生し、マラリア原虫を媒介するハマダラカを防除するための研究が進展していたという背景もあるのだが、台湾におけるハマダラカの駆除は住民にはなかなか受け入れられなかったという。

昭和初期になり近代科学の装いをととのえた応用昆虫学者たちは、天敵導入や誘蛾灯開発といった大規模な先端研究プロジェクトに取り組むことになるが、やがて



近代日本が突入することになる戦争の時代は、人と〈害虫〉の関わりにも大きな影を落とすことになった。戦争では〈害虫〉を兵器として使用するという発想も現実のものとなる。満洲の関東軍で兵士の感染症予防を主任務としていた731部隊は、ノミの増殖法についても研究し、ペスト菌を感染させたノミを中国の都市に散布している。他方では、戦争のための毒ガス研究と並行して世界中で新しいタイプの化学殺虫剤の開発が進められた。なかでもDDTやパラチオンなどの有機合成殺虫剤の発明は、戦後の〈害虫〉防除にきわめて大きな恩恵を与えるとともに、きわめて深刻な問題も課すことになり、その解決は今日の総合的害虫管理IPMへと引き継がれている。

さて、本書は2007年にちくま新書として刊行された『害虫の誕生—虫からみた日本史』の増補版である。本文は基本的に新書版のままだが、300項目を超える詳細な註が付されて出典が明示されているので論考を深めるのに役立つ。また、補章には戦後に整備された〈害虫〉監視システムや〈害虫〉の消滅を実現した不妊虫放飼法などの歴史が加えられているだけでなく、人類の誕生以来の長い時間スパンを見通して再考された、著者の〈害虫〉観が披露されている。ヒトが作りだした人工環境では、ヒトが増殖するほどに特定の共生生物（シナントロフ）が増える。ヒトの社会がそれらを「敵」と見なしたとき、〈害虫〉という存在が生まれ、それらを積極的に排除するために大量の物質とエネルギーがつぎ込まれるようになり、そうした人工環境の産業化の行きついた先に戦争があるのだと。そういえば本文(第四章)にも紹介されているように、太平洋戦争最中の米海兵隊の機関誌では、日本兵が新種の〈害虫〉ニホンジラミ“Louseous Japanicas”として風刺されている。強力な敵国を鬼畜に見立てて恐れ、それを吹き払う神風を期待した時代のことである。

(Kaoru MAETO 兵庫県宝塚市)